

## <随想>地震の朝

著者	北原 文雄
雑誌名	日本文学誌要
巻	52
ページ	80-81
発行年	1995-07-08
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00019847">http://hdl.handle.net/10114/00019847</a>

## 地震の朝

北原文雄

今回の大地震があつた朝、私はナマズのような反応をしていた。普通の日は午前零時から一時の間に就寝すると、朝の六時四十分まで目覚めることはめつたにない。小用に起きることなどここ数年はなかった。ところが地震の日は三回も小用に起きた。一回目午前二時、二回目午前三時五十分、なぜか寝苦しくて仕方がない。三回目六時を回っていたら辛抱しようと思つたが、時計を見るとまだ五時四十分だつた。ゆっくりベッドから起き上がつて寝室を出、トイレへ行く縁側に出了とき、大きな地鳴りとともに激しく家が軋み、突然足元がぐらつた。

地震だ、大きい。妻を大声で呼んだ。外へ出られるように縁側の窓の鍵を開けようとカーテンを開けた。外は薄暗かつた。稲妻が激しくバシツという音を立てて走つた。母屋が轟音とともに軋む。家が倒れると思つた。窓の鍵はなかなか開けられない。何度も妻を呼ぶが返事

がない。物の倒れる音がする。柱や屋根裏の上具がメキメシ・ビキビシと喘ぐ。妻がおどおどしながらやと私の所へ来た。次の揺れが大きいと家を出るぞと妻に告げた。私は安全な場所を無意識のうちに確認していた。母屋・長屋・西座敷のどれが倒れても安全な位置は庭の築山の隅っこしかなかった。

来た！私は妻と手を取り合うように縁側から飛び石伝いに庭先へ逃れた。家が揺れ軋む。頭上の電線が大きく揺れ、弧を描き波打つ。地鳴りが続いている。真冬の庭先に素足で立っているが、足裏に冷たさを感じない。隣家の声が聞こえる。助けを求める声ではない。大丈夫なのだろう。揺れが少しおさまつた。家は何とか立っていた。

急激に冷え込んできた。家の中へもどろうとした時、再び揺れた。縁側で妻と立ち尽くした。揺れがおさまつたのを確認して電燈を点けた。靴下を穿き、衣類をパジャマの上に羽織り、スリッパを縁側に揃えた。広敷きの本箱が二本座卓の上に倒れて、本が畳の上に散乱していた。柱の折れるような音はこれだったのだと気づく。大きな余震でこの後も二度築山へ出た。三度目に居間にもどつてテレビをつけた。震度が画面に出ていた。大阪4・京都5・豊岡5、淡路はまだ出ていない。

「お父さん、朝子のところ大変、震度5よ、電話して」妻に言われて京都の娘に電話した。三回の呼び出し音で娘は受話器をとつた。「地震はどうだった」「揺れたので起きたけど、また寝てます。タンスと本箱が少し揺れただけ」と平静だった。元氣なだけが取り柄の娘だが、再び寝ているとは図太いと少々あきれた。

娘と話している間に、淡路島が震源で神戸の震度6とテレビ画面に表示された。娘もテレビをつけていたようだ。「淡路島が震源地やわ、

家は大丈夫だったの」と娘が言った。「五十年生きてきて、家の外へ出たのははじめてだ。本箱が倒れたくらいで心配はいらない」と伝えた。まだ家の被害は点検していなかった。後で知ったことだが、東京の息子は地震発生時にまだ起きていて、テレビをつけていたとかで、すぐ電話をしたが通じなかったという。少ししてから京都の妹に電話をして家の状況を聞いたそうだ。

六時半に妻が弁当を作るのにガスを使いだした。「おい、ガス漏れは大丈夫か」と言うと「臭いがないから大丈夫」と平然と応えた。娘の図太さは母親譲りだった。息子は何をおいても帰郷しなければならないと妹に話したらしいが、家族の精神構造もさまざまである。

家の被害箇所を簡単に確認して、平常より早めに出勤の途についた。玄関付近を中心にかなり損傷しているが、補修できる範囲だった。十五分ほど早く家を出たが、学校へ着いたのはいつもより二十分ほど遅かった。カーラジオが壊れて一年以上になるので、通勤途中で新しい地震情報は入らなかった。

安平から大町に入ると屋根の瓦が傷んでいる家が多くなる。竹谷を過ぎると屋根が落ち、棟が剥出しになり、傾いている家が増えた。郡家は倒壊している家が多い。伊弉諾神宮の大鳥居や灯籠が倒れていた。カメラで撮影する人がいる。郡家の町は消防団員が救助活動をはじめていた。茫然としている人が目につく。商店街はとも通れそうになかった。道路が各所でひび割れ、倒壊家屋や倒れたブロック塀に塞がれて、車はなかなか進まない。学校へたどり着けるか懸念された。

尾崎も室津も、育波・斗ノ内などの町並みは壊滅状態だった。北へ進むほど被害が大きいうだ。富島の町はどうなっているのか心配になる。室津神社の拝殿が完全に潰れていた。各所で橋と道路に段差が

できていて、車体の腹を打ちながらやつの思いで学校へ着いた。

職員連絡会后、富島の被害状況のひどさを聞いて出掛けた。学校や個人のできることは何か。これは町がどんな状況であるかを知ることが一番である。富島の商店街を歩き出して震えがきた。顔がこわばるのが分かる。連休前ののかな商店街の面影はない。軒並み家が傾き倒れ、廃虚そのものだった。

家屋の下敷きになっている人がまだいると住民が話している。救助して病院へ運んだが、だめだったと話す消防団のハッピー姿の人。火が出なくてよかったと言う人。着のみ着のまま逃げ出すのがやっとだったと言う人。逃げる間もなく十数秒で家が倒れたと話す人。倒壊した数十軒が続く。長い商店街は一瞬にして瓦礫の山だった。ヘルメットもなく歩くのは危険だが、もう後戻りはできなかった。

まるで戦禍の街を歩くような惨状だった。私はいらいらしていた。やり場のない腹立ちを覚えた。被害の大ききになす術もなく、何に対するものともいえない激しい怒りが、私の中にわきあがってくる。一九九五年一月一七日、生涯忘れられない日となる。私は歯ぎしりをしていた。まだ何ができるのかさえその時には考えられなかった。

(きたはら ふみお・一九七一年卒)

(編集部注・北原氏は創作『田植え舞』にて第38回農民文学賞受賞)